
Reminds Boy - **面影を求めて** -

ふるーつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Reminds Boy - 面影を求めて -

【Nコード】

N9879D

【作者名】

ふるーつ

【あらすじ】

コナンが突然行方不明になり、心配する蘭。そこへ、「コナンそっくりの少年を見た」という情報が入る。しかし待っていたのは意外な事実で…！？ オリキャラ出ます。

1 - 始まりは…

その少年に最初に気づいたのは、紳士の方だった。

「おい……あれ」

妻を伴って少年に近づき、抱きおこした彼は、はっとした。

似てる……。

「ここから落ちたのかしら？」

妻の声で、すぐそばの歩道橋に目を向けた彼は、少年の額に目をとめた。

「血が出る。とにかく、手当てしないと」

「家へ運びましょう！」

夫人の言葉に、一瞬はっと瞳を揺らした彼は、うなずくと少年を抱きあげた。

外れかけた黒縁眼鏡を丁寧にその顔から取り、ポケットに入れて

最後のチャイムが鳴ってから10分ほど後、大勢の生徒たちに混じって下校する、蘭と園子の姿があった。

「浮かない顔の蘭に、園子が励ますように言う。」

「だーい丈夫だって！あのガキンちゃんなら、その内ひょっこり帰ってくるよー！」

「うん………」

それでも、蘭の顔は晴れない。

コナンが、ここ10日ほど行方不明なのだ。

『博士のうちでゲームする』という書置きはあったが、確認してみると、博士宅には行っていなかった。

元々、ゲームをしにいつて泊まることはあったが、こんな書置きだけで姿を消し、しかも10日も音沙汰なしというのは、……………異常だった。

どうしてなんだろう。まさか、また事件にでも……………？ 不安ばかりが募る。

その状況を動かしたのは、なじみの刑事からの1本の電話だった。「すみませんが、ちょっと…コナン君に代わってもらえますか？」

探偵事務所に電話してきた高木刑事の妙に歯切れの悪い口調に、小五郎は首をかしげつつ答えた。

「あのボウズなら、ここんどこ帰ってねえよ。搜索願を出そうって蘭が言ってたところだ」

そう電話口に答えた父の言葉に、蘭は思わず受話器をひったくった。

「コナン君がどうしたんですか!？」

「……………ら、蘭さん」

あまりの剣幕に少し絶句したらしい高木は、やがて受話器に向かって、盛大にため息をついた。

「……………ちょっと、妙なものを見てしまいました……………」

1 - 始まりは… (後書き)

しばらく休止するといいながら、1か月で戻ってきました。

組織物にしようかと思っただんですが、なにせ話がまとまっていないので、こっち先にします。

実は、ストーリー的に「ちょっと無理あるかなあ」と1度ボツにしたネタなんですけど、やっぱり思いなおしました。どーも書きたい場面があったもので。

話自体はそう難しくもなく、早々と真相バレそうな気がしなくてもないですが、気楽にいきたいと思います。

話をまとめながらの更新なのでちょっと下口いかと思います。

2 - 目撃情報

指定された杯戸町のファミレス前には、すでに高木刑事がいた。元々、非番を利用して近くまで来ていたらしい。

「それで？コナン君がどうしたんですか？」

ファミレスに入り、席に着くやいなや、待ちきれない蘭が早速話を切り出す。高木はやはり歯切れわるく、微妙に目をそらしつつ話を始めた。

「どうした、というか……見かけたんです。コナン君に良く似た少年を」

「『よく似た』……？」

「ええ。それで、コナン君に双子の兄弟でもいるのかと思って、電話したんですよ」

「……？」

……今いち要領をえない話に、ふたりは首をかしげた。

「双子って……あのボウズじゃねーのか？」

「その子がコナン君じゃないって理由が、何かあるんですか？……理由もなにも」

高木刑事は、困ったように息をついた。

「その子、ある家に入っていったんですよ、自宅に帰るって感じで」

詳しく聞いてみると、話自体は単純だった。とある事件の聞き込み中、高木刑事は、その『コナンそっくりの少年』が中年の夫婦と近くの家に『帰宅』したのを見た。

その様子がまるで親子だったので、コナンには双子の兄弟でもいたのかと、事務所に電話してみたのだ。本人に確認するために。

「ほら、コナン君って、毛利さんの所に預けられてるじゃないですか。だから、もう一人兄弟が、別の家に預けられているのかな、と

「思っています」

「……でも、兄弟がいるなんて、1度も聞いたことありませんよ」
困惑顔の台詞は蘭のもの。

当然だった。コナン本人はもちろん、最初に預かってくれと言ってきた阿笠博士からも、1度だけ会ったコナンの母親からも、そんなことは全く聞いていない。

「ですよね……」

やはり、という顔で高木刑事はうなずいた。

かたや顎をつまみ、かたや腕を組んで黙りこんでしまった二人に、小五郎はあっさりと結論を出した。

「とにかく行ってみるか、その家に」

3 - 登場した少年

『葛西』という表札を掲げたその家は、割と大きな洋館だった。

建物と、夫人の趣味だろう、園芸スペースをぐるりと取り囲んだ柵は鉄製。その柵に枝をかぶせる桜は、さほど大きくはないが、しっかりと季節感を漂わせていた。反対側に茂るツツジも、手入れが行き届いている様子だった。

その柵に囲まれた建物は、全体的にクリーム色。2階建ての壁には大きすぎない窓がならんでいた。

そして、インターホンのすぐそばに張られたシールは、警備会社のもの。おそらく、柵のあちこちにセンサーがあるのだろうと思われた。

「こんにちは、刑事さん！」

対応に出た夫人は、人当たりのよさそうな中年の女性だった。

真っ黒に近い短い髪は、今時珍しく、ほとんど染めていないようだ。目鼻立ちはすっきりとして、顔の皺もさほど気にならず、十分に美人といえる容貌だった。

「うちに何か？あの空き巣は、もう捕まったと聞きましたけど……」
怪訝な顔で首をかしげる夫人に、高木刑事は苦笑した。

「ええ、事件は無事解決しました。今日うかがったのは、この男の子のことで」

「男の子？……ああ、英明のことかしら？」

夫人がまた首をかしげると、その名前に反応したのか、軽い足音が近づいてきた。そして、玄関に出てきたのは

「コナン君！」

思わず声をあげる蘭。一緒にいた小五郎も高木刑事も、息をのんだ。

顔から背格好から、コナンそっくりな少年。違うのは、眼鏡をか

けていないことだけだ。

しかし少年は、蘭の声に反応せず、夫人に目を向けた。

「誰？この人たち……」

また息をのむ3人をよそに、夫人も困ったように高木刑事を見た。
「あ、ごめんね。君、英明君っていうのかい？ちよっと、話したいんだけど」

1番に我に返った高木刑事が声をかける。少年は素直にうなずいて笑顔でいった。

「じゃあ、ぼく飲み物持つてくるね！みんな紅茶でいい？」

前半は夫人に、後半は蘭たちに言うと、客人がうなずいたのを確かめ、少年はどこへか消えた。

「自己紹介が遅れましたね。私、葛西茂子といいます」

頭を下げる夫人にあわててふたりが自己紹介を返すと、高木刑事がまず疑問を口にした。

「ご主人はお仕事ですか？」

「ええ、昼間はいつも一人ですわ。だから時間をもてあまして、花ばかり増えてしまっんです」

そういつて苦笑する茂子の奥から、英明がティーカップを盆に乗せてきた。

「あ、手伝っわ」

「ありがとう」

習慣的に手を出す蘭に、英明は笑顔で盆を差し出した。

え……？

手元を感じた違和感を目を丸くする蘭に気付かないかのように、英明は茂子の隣に座った。

「お客さんって珍しいから、嬉しいでしょ？」

「そうね。ちゃんとお茶持つてきて、えらいわ」

「……………」
頭をなでられる英明を見ながら、蘭はそつとポケットに手を入れた。

3 - 登場した少年（後書き）

この場面、1000文字以内におさめようと思ったのに・・・トータルで倍増してもーた。

あ、夫人は丁度、57巻の奥平詠子さんを黒髪にしたイメージです。あの人なにげに気に入ってるんです。

4・月光の下で

「ところで、息子にお話って?」

茂子の言葉で、ようやくきっかけをつかんだ高木刑事は、真顔になった。

「……その子、あなたの息子さんなんですよね?」

「ええ。それが何か?」

不思議そうな茂子に、蘭達はなんともいえない顔になった。どう話せばいいものか。

しばらく、うろつろと視線を彷徨させた後、口火を切ったのは蘭だった。

「実は私の家に、その子にそっくりな男の子がいたんです。でも、少し前から行方不明で……そしたら、ここにそっくりな子がいるって聞いて、……何かご存知じゃないかと思いましたが」

話を無言で肯定する小五郎に、茂子は目を丸くした。

「まあ。弟さん?」

「いえ、知り合いの親戚の子なんですけど、ご両親が仕事で海外にいるとかで、うちで預かってたんです」

「ま、一言でいうと居候ですな」

小五郎の余計な補足に、半目でにらむ蘭。しかし、それも一瞬だ。高木刑事が、ふと思いついたように尋ねた。

「そつえば、息子さんはおいくつなんですか?」

「今年で8歳になりますわ。やんちゃ盛りで」

言いながら嬉しそうに息子を見る茂子に、蘭は無意識に目を細めた。　　ということは、現在は7歳。

コナンと同じ年齢だ。

恐らく、ふたりとも同じことを考えただろう。高木刑事の気のない相槌がそれを物語っていた。

帰り際、門まで3人を見送った茂子は、申し訳なさそうだった。

「ごめんなさいね、お役に立てなくて」

「いいえ。こちらこそ、突然お邪魔しまして」

形式通りのやりとりを聞きながら、蘭はじつと見ていた。

来たときに「きれい」と思わずもらした、この家に唯一の、桜の木を。

陽もとつぷりと暮れた後、蘭は身支度をして出かけた。

「ゴメンお父さん、急に約束できちゃったから、夕飯はポアロで食べてー!」

そう言うのと、案の定父はブツブツ言っていたが、構わず家を出た。

『急な約束』は嘘じゃない。

昼間の記憶を頼りに、あの家へ歩いた。まあ、父に怪しまれないためもあって早めに出たから、急ぐ必要はない。

ポケットから小さな紙を出して、再び目を通す。：何度見ても、内容は同じだ。

『よる8時、もんそとがわのさくらの木の下』

紅茶を運んできた盆の下に潜ませてあったメモだ。多分、あの視界から消えた時、急いで書いたんだろう。誰にも とくにあの夫人に、気付かれないように。

こんな風呼び出すということは、やっぱりあの子はコナン君なんだろうか。でもどうして、あの人の息子のふりなんかしてるんだろう？

夜7時40分。家に着いた蘭は、桜を見上げていた。月明かりだ

けで、十分美しく夜空に映えている。

すると。

誰かが、蘭の手を引いた。突然のことに、思わず手を引く。

「こつち。そつちはセンサーに引っかかるよ」

囁くような声で蘭を誘導し、センサーから離れた少年は、そこで一息ついた。

「来てくれたんだ。よかったよ、あれこっそり見てくれて」

微笑む少年に、蘭はさっそく疑問をぶつけた。

「コナン君？どうしてこんな風に呼び出したの？」

「……」

少年は答えず、ただ目を細めた。少しして、また息をつく。

「……教えてほしいんだ」

記憶のままのまっすぐな瞳で、少年は奇妙な台詞を口にした。

「僕はいつたい、誰なのか」

……『目が点になる』とは、こういうことをいうのだろうか。

一瞬、冗談かと思っただが、街灯と淡い月明かりが照らすその顔は、真剣そのものだった。

「……君は、あの人の息子の『葛西英明君』じゃ、ないの？」

少年は、顔をうつむけた。

「……そう振る舞ってた。けど、わからない」

「どういうこと……？」

少年は蘭を見上げた。それは、見たこともない、不安に揺れる瞳。

「……覚えてないんだ」

「え……!？」

少年は、今出てきた洋館を見上げた。

「僕、何もわからないんだ。気がついたらあそこで頭に包帯巻かれて、ベッドに寝てた」

その台詞で、蘭の頭にひとつの単語が浮かんだ。

記憶喪失。

「僕は、その『コナン君』なのかな。そっくりなんだよね？お姉さん」

だだをこねる子供のように蘭の服をつかみ、必死に訴える少年は、蘭と一緒に暮らしてきた『コナン』とはまるで別人で。……蘭は頭が混乱してきた。

「でも、君は『英明君』だといわれたんでしょ？どうして、違つと思つの？」

「……」

少年は、つかんでいた服を離した。再びうつむいた顔は当たる街灯の角度が変わり、実際以上に沈んで見える。

「……すごく、小さな事に気がつくんだ。あの人……僕の不とした仕草とか癖とか、そういうのにすごく反応して、『英明はそんな風にしない』って直すんだ。この1週間で、何度も何度も」

そしてまた、蘭の目を見据えた。少しだけ、輝きを取り戻した瞳で。

「お姉さんは変だと思わなかった？あんなに僕を可愛がってるのに、部屋に写真が全然飾ってない。それに　あの人言ってたでしょ？『いつもは一人だ』って。僕がくるまでずっと昼間は一人だったから、思わず言っちゃったんだよ」

「……………」

蘭は昼間見た、すっかりとこぎれいなリビングを思い浮かべ、次いで茂子夫人の話を思い出した。そして、……コナンをまじまじと見た。

少々感情的な口調さえ除けば、それは蘭の知っている『江戸川コナン』だった。

「……あそこで最初に気がついたのは、いつ？」

「1週間ちよつと前。正確にはわからないけど」

そこまで答えてから、少年は手首に目を移した。蘭はそこで初めて、彼が腕時計をしていることに気付いた。

「……………ゴメン、そろそろ戻らないと抜け出したことがバレる。また、来てくれる？」

すでに踵を返している少年に、蘭は苦笑しつつ答えた。

「うん、ちゃんと正面から訪ねるよ」

少年はそれでやっとこの場の異様さに気付いたのか、少し照れ笑いした後、闇に消えていった。

「……………」
さつき初めて見た子供らしい仕草に、少し驚いた蘭だった。しかし、それも道理かもしれない。あの話からして、あの子が記憶喪失になっていることだけは、確定的だ。

自分が誰なのかわからない恐怖。それは蘭にも経験があるが、その上両親だという人たちに違和感など感じてしまえば、それは倍増するだろう。

しかし、あのままあの家を出てしまわなかったあの子にも、何か考えがあるような気がする。

「……………どうすれば、いいのかな」

自分に、何ができるのか。わかるだろうか

アイツ
彼なら。

新一なら。

5 - 暴露（後書き）

タイトルが間違ってる気がしないでもない・・・。

どうも慣用句や熟語で一言でまとめたくなるんですよ。

記憶喪失の事実に関しては、前話のラストで見当つきますね。今回は補足です。

そして・・・一つ謝らねば。

伏線張り忘れしました。リビングの描写を入れればよかったですね。反省します。

6 - 就寝

幸い、こっそり抜け出したことには気付かれていないようで、彼はほっとした。

例の空き巣事件以来、防犯センサーを増やしたことで、安心しているのもあるだろう。

「……………」

さつき彼女に言ったことは、事実には事実だが、実際は過去の産物だった。

癖や仕草、ついでに口調を細々と直されたのは最初の2、3日。そのあとは、無難に彼らの息子を演じていたから。

夫婦の話に違和感を感じてすぐ、食器や衣類、アルバムをこっそり調べた。そして確信した。自分は、この家の息子『英明』ではない。

そして、彼らには確かに『英明』という息子がいたのだという事もわかった。

そこでこの家を抜け出さなかった理由はいくつもあった。

今出て行ったところで、行くあてもない。これが一つ。

家出少年として警官にでも捕まれば、自分の両親だと言い張るあの夫婦の元へ戻されることが予想できた。これが一つ。

そして　あの夫婦の心の傷をなんとかしたい。…これも一つ。
(彼女に、あのひと聞いとけばよかったな。『コナン』も、こんなお人好しだったのかどうか)

家主らしい足音が近づいてきて、彼は慌ててベッドに入った。

小さな音とともに部屋に入ってきた男は、ベッド脇の机に置いてある眼鏡に目を止めた(他に乘っている物はないので、多分そうだ)

。そしてベッドで眠る『息子』の布団にそつと手を添えた。

「……………すまない」

それだけ零すように言うと、また静かに出ていった。

(……………今日はもう、ここまでだな。あの人が、明日も来てくれれば
いいけど)

そう結論つけて、彼はベッドに入ったまま、ゆっくりと目を閉じた。

6 - 就寝（後書き）

「コナンから記憶だけ取ったらどうなるか」を、ちょっと考えてみました。コナンなら、直感的にやりそうな事をつらつらと。

「もっとこんな風になると思う」「っていうのがあればどうぞ。参考
にさせていただきます。」

7・迷路の中で

「わー、ほんとにそっくりだね!!」

「いや、コナン君より少し子供っぽい気がしますよ」

「生意気でもねーぞ!」

少々……いやかなり興奮気味な声は、おなじみ少年探偵団のもの。もちろん、ここには哀と阿笠博士の姿もあった。

蘭の連絡で葛西家を訪れたこの5人。行方不明のコナンにそっくりの子がいる、という話に興味をもって会いにきてみたのだが、今や完全に彼で遊んでいた。

表向きの理由はそれ。実の所、蘭としては期待することがあった。彼らと会うことで、少しでも記憶が戻れば……と思ったのだ。最悪何の変化もなくても、この1週間『両親』以外にほとんど会っていないらしい彼の、気分転換になればと思った。

茂子夫人は別段嫌な顔をするでもなく……というか、幼い客人たちをとても気に入ったらしい。英明に「じゃあ、遊んでもらってなさい」というと、キツチンから盆を持ってきた。

「さあさ、ジュースよ。お菓子が少ししかなくて、ごめんなさいね」クッキーとオレンジジュースを持ってきた茂子に、子供たちは一斉にテーブルへと集まった。

大喜びでクッキーを食べはじめた子供達を、おかしそうに見る茂子。彼女を横目に見ながら、哀はさりげなく英明に近寄った。

英明はといえば、随分ハイテンションな探偵団に、半ば気圧けおされている。

『多分、コナン君に間違いないと思うの。でも、記憶をなくしてるみたいで……』

昨夜、電話で言われた蘭の言葉が頭をよぎる。

「……………ねえ」

声をひそめる哀。同時に、目も少し細めた。

「本当に、何も覚えてないの？」

「何も……………？」

ポカンとする英明。しかし、やがて何か思いついたらしく、鋭く目をすがめた。

その顔は、コナンそのもので。哀は一瞬、本気で記憶が戻ったのかと思つた。……………次の台詞で我に返つたが。

「……………君は知ってるんだね。オレが いや、『コナン』が何者なのか」

「何者？」

「『コナン』は、ただの小学生じゃない。…そうだろ？」

目をみはる哀に、彼は少し苦しそうに、眉間に皺をよせた。

……………彼が何より不可解に思つたのは、なぜか自分を息子にしたがる、あの夫婦の思惑ではなく 自分自身だった。

『両親』の話や態度に不信感を抱いたとき、『自分がいた痕跡』を確かめようととつた方法さえ、今思えば奇妙だ。 小学生の発想じゃない。

この家の中の状況や夫婦の性格を見通し、わずか3日ほどで『葛西英明』を演じられるようになったこの適応力も。

そして1番不気味なのは、自分が誰かもわからないまま、事実を冷静に分析し、その上でこの家に居続けていられる、自分の神経と精神力。

「あの蘭つていう人もあの子たちも、『コナン』をただの子供だと思つてみたいだから、黙つてた。けど、君は知ってるんだろ？」
『コナン』が、本当は何者なのか」

「……………」
真剣に見つめる『英明』の視線をなんとか受けながら、哀は確信した。この少年はまさしく彼だ。

「あ、哀君！どうする？話すか？」

動揺する博士にわずかに考えこんだ後、哀は口を開いた。

「……………一つ聞いわ。工藤新一という名前に、心当たりある？」

隣で息をのむ博士をよそに、彼は少し眉根を寄せた。

「……………『コナン』に関係ある、名前なんだね」

必死に、あるかどうかわからない記憶をたどる。それは数分続いたが。

「……………わからない。聞いたことがあるような気は、するんだけど」

「そう。じゃあ、今は何も聞かない方がいいわ」

哀は内心の落胆をきれいに隠した。本名に反応するようなら、近いうち記憶が戻る可能性は高まる。そう思ったのだが。

その頭脳ゆえに勘違いしそうだが、彼の記憶自体はまったたく戻っていない。どころか、今後も戻らない可能性も0ではない。

消してしまいたい可能性だが、……………万一を考えると、うかつに真実を話せば、彼はますます混乱してしまう。

（この人もご主人も、記憶を戻す気はないのかしら？）

彼の記憶喪失をいいことに、完全に息子にできてしまっている茂子を見て、哀は怒りをおさえた。そんな勝手な話があるか。

コナンが…新一が、自分にとって、子供達にとって、そして彼女にとって、どれほど大切な存在か。

「……………今日はここまでね。きりをみて帰りましょ、博士」

博士と同時に『英明』にも聞こえるように言うと、哀は探偵団の

所に戻った。

きつちり完食したお菓子のお礼を言つと、5人はまた、門を
通つて家路についた。

8 - 落胆（後書き）

哀ちゃんの出番、もうないかと思われます。出番はあっても台詞すらなくなる気が・・・。

なぜか、哀ちゃん出すの苦手なんです。好きなんだけどなあ。

話数は増えてもなかなか進まない話ですが、どうぞあたたかい目で読んで下さると嬉しいです。

9 - 早朝の問い

不思議な夢をみた。

覚えのない道を歩いていたのは、小学生ではない自分。そして着いたのは、葛西家と同じような大きさの洋館。ただし、手入れが十分ではない家は少々くたびれている。

そして、その間中、誰かの声自分が自分呼んでいる。

…！ …ち！

その洋館の門につけられていた、表札は。

『工藤新一という名前に、心当たりある？』

あの少女の言葉が、脳裏によみがえる。

「……誰なんだよ」

自分の名前は、『江戸川コナン』のはず。なのになぜ、『工藤』と刻まれた表札の家に帰っていたのか。…あの声は誰のもので、なんと呼んでいたのか。

(工藤新一って、コナンの何なんだよ!?)

やっと…本当の自分を見つけたと思ったのに。

足を動かしているうちに、階下に降りていた。目の前には『父親』

「おや早いな。どうかしたか？」

「……聞いておきたいことがあって、さ」
首をかしげる昌好。

「本物の英明君は、どうして亡くなったの？」

目をみはる昌好に構わず、彼は答えを待った。……否、答えられるかを、待った。

なぜ自分が驚いたのかさえ、昌好にはわからなかった。

この子に、自分たちの嘘が見抜かれていたから？ いや、違う。

ただ一言で済むはずの答えは、なぜか喉から出てこなくて。…胸が苦しい。急激に喉がかわく。

彼はしばらく待っていたが、やがてちいさく息をつくくと、背を向けた。

「……………っ！」

「また、いずれ聞くとと思う。その時は、ちゃんと教えてね」
振り返った彼の顔には、怒りも困惑もなく。少しだけ憐憫れんびんが混じっているものの、「困ったもんだなあ」といった顔だった。

例えるなら、微笑ましい夫婦ゲンカに苦笑しているような。

9・早朝の問い（後書き）

私って夢ネタ好きだなあ・・・としみじみ思います。

ほとんどの話に1度は出ますね。（一時期ハマっていた某マンガの影響です）

アドバイスを頂いて気付くことってありますね。なんか見方がガラッと変わった感じですよ。

ここまで読んで下さり、ありがとうございます。

「あら、今日はみんな一緒なのね」

再び少年探偵団を引き連れて呼び鈴を押しした蘭を、茂子は嬉しそうに迎えた。

「はい。……コナン君がまだ行方不明だから、この子たちもちょっと落ち込み気味なんです。こうやってみんなで出かければ、気が晴れると思いますよ」

子供たちに聞こえないように言う。実際、探偵団を連れてきた理由の半分はそれだった。

「お邪魔しまーす！」

声をそろえて玄関をあがる4人の背中を見つつ、茂子もまた声をひそめた。

「そういえば、その『コナン君』、もう2週間ほど行方がわからないのよね？大丈夫かしら……？」

「大丈夫ですよ。私はそう信じてます。搜索願もやっと出しましたし」

「あら、そうなの。無事見つかるといいわね」

「ええ」

茂子に笑ってみせて、蘭は階段をおりてきた英明に目を向けた。前に会ったときより随分落ち着いてきた表情に、少し安堵した。

「これ、博士の新作のゲームなんだぜ！」

「はかせ？…ああ、あの人が」

「うん、前にいっしょに来たおじいちゃん。よくキャンプとかにも連れてってくれるんだよ！」

まだ『おじいちゃん』って年じゃないわよ、と約2名が心中つっこんだ。

「こんな探偵グッズ作ってくれたりな！」

元太が突き出した腕についている時計を見ながら、英明はぼんやりとつぶやいた。

「…探偵……」

「こつやってライトにもなるのよ！」

歩美がライトをつけると、何かを確かめるように枠の部分に手を伸ばす。

「……それだけじゃない」

「？何か言いました？」

光彦に聞き返されて、初めて自分が無意識に口を開いたことに気付いた。

「あ、いや。何も」

（オレ、今……何か言おうとしたか？）

しかし、頭の中でよぎった小さな光を追うまえに、英明はまた、3人との談笑に駆り出された。

そばで見ていた哀が目を細めたことにも、気付かなかった。

11・出てきた名前

蘭は庭の園芸スペースに出た。それに気付いた茂子も部屋を出てふたり並んだ。

「わあ、すごい綺麗に咲いてますね。手入れ大変そうですね」

「そうでもないわ。子育ての片手間なもの」

「そうですね。英明君、大人しそうな子ですしね」

「そうそう。言うことはちゃんと聞いてくれるから。この子たちも育てやすいわ」

そういつて花びらをなでる茂子を見つつ、蘭は内心のちょっとした落胆を隠した。

(んー、だめか。ひっかかってくれない)

コナンは本来、『大人しい子』とは程遠い。そこをちょっと突いてみたのだが、どうやら見事に『英明』を演じるコナンに、茂子は本物の英明を完全にダブらせているらしい。

『あの人、思い込んでいるんじゃないかしら。江戸川君を、本当の息子だと』

昨夜の電話での、哀の言葉を思い出す。

「でも、やっぱり女の子はいいわ。花に興味をもつのは、女ばかりなものね」

「そうですね？」

適当に相槌をうちながら、……蘭は決意していた。

(だめよ、それじゃ。誰にとっても良くない。何も残らないもの)

部屋に戻ってきた蘭に、子供たちはなかなか気付かなかった。た

だ、英明だけが近寄ってきた。

「…ねえ、聞いていい？」

「何？……また何か相談？」

後半部分、無意識に声をひそめる蘭に、彼は首をふった後、数拍黙った。そして。

「…好きな人っている？」

目を点にする蘭。そして質問の意味を理解すると。

「…っえ！？い、いないわよ？別に！」

「……そっか」

赤くなつて否定する様子は、説得力皆無。彼は当たり前のように「いるんだ」と受け取った。

「なになに？どうしたの？」

「蘭さん、顔赤いですけど、どうしたんですか？」

ゲームに熱中していた探偵団が寄ってきた。さすがに蘭の慌てようには気付いたらしい。

「あなたが赤くなるということは、あの人関連かしら？」

「えっ…べ、別に？」

いつのまにか寄ってきていた哀の推測に、ますます慌てる蘭。傍から見ているとかなり見物だ。

「ああ、新一お兄さん？」

歩美が出した名前に、英明は少し驚いたように振り向いた。

「新一お兄さん？それ誰？」

「蘭さんの恋人さんですよ」

「園子ねーちゃんは、ダンナだっていつてたぞ！」

「違つてばー！」

今度こそ真つ赤になった蘭に、英明はぼつりとつぶやいた。

「…じゃあ、言わないほうがいいか」

11 - 出てきた名前(後書き)

蘭の反応、ちゃんと想像できますでしょうか。執筆中かなりニヤニヤしてました(笑)

次あたりからシメに入ろうかと思っております。

12・覚醒のために

その声は、受話器越しでもわかる、いつもと様子が違うものだった。

「明日の夜、また来てくれる？」

「いいけど……どうして夜なの？」

「夫婦そろってなきや、意味がないと思うから。あの人、いつも帰り遅いんだ」

蘭は悟った。…おそらく、彼がいわんとしていることは、私と同じ。。。

「そうだ、僕の部屋に来てくれる？見てほしい物があるから」

「ええ、いいけど。……大丈夫？」

自分を、仮にも『息子として』『可愛がってくれた』『両親』を傷つけるだろう事は、彼にとってもつらいに違いない。彼は数拍、沈黙した。

「……………わかってるから」

最初、つぶやくようにつぶいだ言葉は、やがてしっかりと意味をもつ。

「夢だって、わかってるから。醒まさせてあげないと」

「……………そうね」

蘭はうなずいた。

そう、夢なのだ。度の高すぎる酒に酔わされたような、夢。

しかし、酒はいずれ抜ける。いつまでも、心地よい夢に浸かっていてはいけない。

それでは、誰も前に進めないから。

「わかった。明日の夜、またお邪魔するわ」

「勝手に入っていいよ。話をする前に感づかれても面倒だし、蘭さんならもう不審人物にはならないだろうしね」

「…それはだめでしょ」

どこまで冗談なのこの子。心中つぶやきながら、蘭は気になつていたことを思い出した。

「ねえ、どうしてあんなこと聞いたの？」

「え？」

「ほら、…私に、す、好きな人いるかって」

思い出して、また顔が赤くなる。反対に、電話口では苦笑する気配があつた。

「んー…それは保留かな。今んとこ」

「何？保留って」

「気にしないでってこと。困らせたくないしね。じゃあ、待つてるから」

さりげなく、しかし遠慮なく切れた電話に、蘭は首をかしげた。

受話器を置いた彼は、さっきの苦笑を残したまま息をついた。

だって、まだ言わないほうがいいから。少なくとも、今の『オレ』が言っている事じゃない。

この気持ちはきつと、元々もつと強く、『コナン』がもっていた想い。『コナン』ではない今の自分が告げられることではない。すべては、記憶を戻してからの話だ。

そして、今自分が言った言葉を思い出す。

待つてるから。

(……何だろう。なんか、胸がざわざわする言葉だな……)

誰かに幾度となくいわれていたような気がする。そしてその度に、何かおおきなものを、胸に抑えつけていたような。

待つてる。

「……………!?!」

不意に頭に響いた台詞に、はっとした。それはまぎれもなく。

「オレの声……………だな」

つぶやいて、確認する。確かに、今のは自分の声。

(…もしかしてオレ、実はけっこう思い出してんのか?)

しかし、何か足りない。浮かんだ欠片かけらは本当に小さなもので、

全体像がまだ作れない。……………彼は自らの掌を見つめると、やがて握った。

(……………あの人に)

彼女にもう一度会えば、わかる。それは妙に強い　予感だった。

12・覚醒のために（後書き）

あと2話ぐらいで終わらせるつもりです・・・が、今ちょっと頭が強制休眠してますので、どうかなあ。

調子がよければあさって、全部更新できると思います。期待せずにお待ち下さい（ひどい言い草や）。

13 - 決意を胸に

支度を終えた蘭は、もう一度、住み慣れた我が家を振り返った。

コナンのいない家。

(大丈夫、取り戻せる)

自分に言い聞かせて、扉を閉めた。もうひとりの大切な家族を、取り戻すために。

「あら、どうしたの？こんな遅くに」

茂子夫人は、来訪者^{らん}に目を丸くした。顔見知りとはいえ、今はもう夜8時過ぎ。普通、来るとしたら時間指定の宅配ぐらいだろう。

「夜分に失礼します。えっと、ご主人はおみえでしょうか？」

とりあえず話題をふってみる。一度、会っておかなければならないと思っていた人物だ。

「私に何か用かな？」

茂子の後ろから現れた中年の男に、元々礼儀正しい蘭はかるく頭を下げた。

「あ、初めまして。毛利蘭といいます。英明君とは、仲良くさせていただけます」

「ああ、あなたが。息子から聞いてます。あなたをととても気に入っているようで」

とたんに警戒心を解いた彼に、蘭は少しだけ目を細めた。

「……。ところで、英明君のお部屋はどこでしょうか？」

「？それなら、2階の端の部屋ですが」

不思議そうな夫妻に構わず、蘭は靴を脱ぎ、玄関を上がった。

「そうですか。ちよっと、失礼します」

ちよっと強引かとも思ったが、前回の訪問とは明らかに違ったの

だ あの子の反応が。

話を通しておくと言っていないながら、実際夫妻は承知していない。いい口実を思いつかなかつたから……と考えられなくもないが、結果としてずいぶん違和感だ。

そして、訪ねてくれといいながら、本人が出てこない違和感。前回は前触れもない訪問だったが、物音と声で呼ばれるまえに姿をみせたのに。

たしかに、前回とはまったく目的も意気込みも違う。しかし、それ以上の『変化』をあの子に感じる。

「ちよ、ちよつと、あなた何を……！」

「僕が呼んだんだ」

しかし違和感の正体は、階段をのぼり切った蘭の目の前 例の部屋の扉の前に立っていた。

続いて階段を上ってきた夫妻は息をのんだ。いつのまにか部屋から出てきていた少年に。そして、少年のまとう、空気に。

「これを、蘭さんに見てほしくてね」

そう言ってかざした右手には、見覚えのある黒縁眼鏡と、腕時計があった。

「あ、それ……！」

それは紛れもなく、コナンがいつもしていた、あの独特なデザインのものだった。

「やっぱり、『コナン』のものだったんだ。これ、僕が目覚ましたときからベッドの脇にあった。この間は反応なかったから違うのかと思つてたけど、……単に暗くてよく見えなかったみたいだね」

すっかり『わが子』でなくなった少年にまつ先に動揺したのは、茂子のほうだった。昌好のほうは、色々な感情に縛られて動けないらしい。

「英明、どうしたの！？それはあなたのじゃないわ！母さんに渡さない」

有言実行とばかりに歩み寄る茂子を、彼は避けもしなかった。ただ一言で止めた。

「オレは英明じゃないよ」

空気が、凍りついた。

14・愛しさと切なさ、弱さと

「何を、言ってるの…?」

本気でシヨックをうけている茂子が気の毒に思わないでもなかったが、仕方がない。

彼は迷わなかった。

……どのみち、自分がこの夫婦の息子を演じつづけたところで、何も変えられないから。

「オレの名前は、江戸川コナンだ。あなたは死んだ息子に似たオレを、かわりにしようとしただけなんだよ」

まるで、すべて思い出しているかのような、自信に満ちた口調。

しかし、当の茂子はその表情をみる余裕も、その言葉を理解する余裕もなかった。

「……何を言ってる…、…違う…違うわ。あなたがそんなこと……そうよ、あの人…!」

混乱してブツブツつぶやいていた茂子は、不意に視線を定めた。

蘭の方へ。

「えっ!?!」

「あなたが、あの子に妙なことを吹き込んだのね!?!」

丁度階段の最上段に立っていた蘭に茂子がかみかかるうとした、瞬間。

家全体を揺らすような音が、響きわたった。それは断続的に続き、音が止まったときには、すべてが止まっていた。

蘭には、何が起こったかわからなかった。周囲を見渡し、階段の下に倒れている彼を見つけて、やっと理解した。つかみかかられそうになった自分を庇った彼が、誤って階段を踏み外し、転げ落

ちたのだと。

しかし、状況判断する間もなく、蘭と茂子は階段を駆け下りた。

「コナン君!?コナン君!」

「英明、英明しっかりして!」

意識のない少年に、ふたりがそれぞれ望む名前で声をかける。

その声に反応してか、彼の手が弱々しく上がる。目を開かないところを見ると、無意識らしい。

そして、弱々しい声。

「……………ここに……………いる……………」

手をとったのは茂子だった。が。

「……………らん……………」

茂子は思わず、取っていた手を離れた。床に落ちるまえにその手をとった蘭は、周りを見渡しつつとにかく叫んだ。

「救急車を!早く救急車を呼んで!」

「……………今呼んだよ。数分で来てくれるだろう」

落ち着いた声で蘭に応えたのは、昌好だった。力が抜けて、へたりこんだ茂子を支えながら、彼は視線を蘭に向けた。

「すまなかった」

「……………」

そして、視線をコナンに向ける。

「……………あの子を見つけたのは、偶然だったよ」

出かけた帰り、歩道橋の下で倒れていたコナンを見つけたのは、偶然だった。

抱き上げたとき、その面差しに驚いた。

似ていたのだ。亡くした愛する息子に。顔かたちはそれほどでもなかったが、なぜか面影があった。

「あの時、ちゃんと救急車を呼んでいれば……こんなばかなことはしなかっただろう」

家に連れていこうと言った妻は、救急車というものの存在をあえて消し去ったのか、本当に忘れていたのか。……しかし、昌好は消し去ってしまった。その選択肢を。

救急車で、ちゃんと病院に搬送はんそうしていれば。

しかるべき人物に事情を聞かれていたら。きっと素直に話したはずだった。

あるいは、目を覚ましたこの子が記憶を失っていないかったら。『息子』にしていまいたいなんて、考えなかっただろう。

都合の良すぎる条件がそろってしまった。だから、ふたりは酔ってしまったのだ。何年も前に、喪うしなったはずの夢に。

蘭は複雑な瞳を昌好に向けていたが、目を閉じたままのコナンを見下ろすと、静かに言った。

「記憶は、必ず戻します。どんな方法を使っても」

あの強くて優しい少年こを　コナン君を、絶対に取り戻す。

話の終わりを待っていたかのように、サイレンが聞こえてきた。

14・愛しさと切なさ、弱さと（後書き）

珍しく、サブタイトルもじりました。確か華原智美だったと思うが・
・。まあ違っても気にしないけど（すごい失礼？）

おし、あとはエピソードじゃ。出しっぱなしのネタの整理、オチ・
・つくかなあ。

15 - 起きた果報

蘭の決意は、結果的には無用だった。
というのも。

コナンは頭を打っていたものの、幸い命に別状はなく、脳波に異常がなければ1週間程度で退院できる、という診断結果だった。
そして翌朝、コナンは目を覚ました。

「ん……」

付きっ切りだった蘭は、その掠れた声かすをしっかりと捕えた。

「コナン君、大丈夫!？」

ゆっくりと目を覚ましたコナンは、寝ぼけ眼まなこであたりを見渡した。
そして、蘭に気付くと。

「……あれ?どうしたの?」

「階段から落ちたのよ!覚えてない?」

「え?……あー、そっか。ごめんね蘭姉ちゃん、心配かけて」

「いいのよそんなこと! ……え?」

あることに気付き、蘭はコナンを改めて見つめた。映るのは、
待ち望んでいた眼差し。

そして今聞こえたのは、聞きなれた呼び名。

「……コナン君、私がわかるの?」

苦笑を浮かべながら、しっかりとうなずくコナン。

「ゴメン、変なことになってたよね」

「……そうだね」

答えながら、考えこむ蘭。

そういえば、昌好は言っていた。コナンは、歩道橋の下で倒れて

いたと。

まさか。

「多分、そうだと思うよ」

蘭の考えを見透かしたように、コナンがうなずいた。

「前は、歩道橋から落ちたショックで記憶が飛んじやったと思う。で、また階段から落ちたショックで、戻ったってところかな」

そういつてまた苦笑するコナンを、蘭は思わず抱きしめた。

「……よかった……！」

搾り出すような声に、コナンは何も言えなくなった。一瞬赤面した顔もすぐに落ち着いて、……そと蘭の背中に手をまわす。

「……ごめんなさい」

「いいよ、謝らなくて」

そのまま、数分もいただろうか。やがてコナンを解放すると、蘭は病室の戸口に向かった。そして振り向いて言った。

「先生、呼んでくるわね！」

診察も終わり、コナンは気になっていたことを尋ねてみた。

「ねえ、あのふたりは病院（い）にいる？」

『あのふたり』が葛西夫妻を指すことに、蘭はすぐに気付いた。

「うん、待合室にいると思うけど。…話す？」

「うん」

即答したコナンに少し目をみはった蘭だが、やがて納得したように微笑んだ。

「じゃあ、呼んでくるね」

16 - 似ていたのは

そのふたりは、一見すると『事故の被害者のお見舞いに来た加害者』だった。

それくらい表情も暗く、雰囲気もどよんとしていた。特に茂子のほうは、ほとんど真っ青だった。

ベッドの3mほど手前で足を止めた夫妻に、コナンは苦笑した。

「初めまして、かな。江戸川コナンとしては」

その言葉でやっと顔を上げた夫妻は、まったく悪意のないコナンの表情に戸惑った。

「…怒らないの？ 私たちを…」

「私たちは、自分の勝手な気持ちを君に押し付けていたんだぞ？」

「だって 僕あなたたちに、何もされてないよ？」

はっとするふたり。

コナンはあの家から出ようと画策していたが、それはあくまで、『自分の家はここじゃない』と感じていたからなのだ。彼らの息子としてなら、生活に何の不便も不満もなかった。

傷の手当をし、服を用意し、食事を食べさせ、寝床を整えて。

ただコナンと『死んだ息子』を混同していただけで、犯罪に該当することは無い。

「英明君は、きっと幸せだったろうね」

一息ついて、コナンは本題を切り出した。

「じゃあ、質問するよ。英明君は、どうして亡くなったの？」

ふたりは少し表情を変えたが、間はあかなかった。

「……事故だよ。もう5年も前のことだ」

茂子ももう取り乱すことはなく、ただ涙を一筋、流した。
「本当に、突然のことだった」

あんなに突然のことではなければ、ふたりとも、ちゃんとその死を受け入れることができただろう。しかしふたりには、最愛の息子と最期のときを過ごすことも、その死を受け入れることも、できなかった。

5年間、話題にすることもできなかった。同じように写真を飾ることもできず、アルバムもあまり目に付かない所に移した。

「……忘れてしまいたかった。いや、忘れられたと思ったんだね。だから、君に聞かれたときは、自分に驚いたよ」

「うん、だと思った。だから聞いてみたんだよ」
うなづくコナン。

人は言葉にして口に出すことで、その事実を再確認する。だからコナンは以前、尋ねてみたのだ。昌好が、言葉にできるかどうか。

結果はNOだった。それで、彼がまだそれを引きずっていることに気付いた。

「でも、今日はちゃんと答えてくれた。だから、もう大丈夫だね。ね、茂子さん？」

初めて目を向けられた茂子は、まだ不安そうな視線をコナンに向けたが、やがてちいさく笑った。

「……やっぱり、あなたは英明に似てるわ。瞳^めが、ね」

1番似ていたのは顔ではない。まっすぐな、優しいその眼差し。コナンはそれを聞くと、最後にもう1度、笑った。

「ねえコナン君」

夫妻と入れ違いに入ってきた蘭は、ちょっと気になっていたことを訊いてみた。

「どうして、歩道橋から落ちたりしたの？」

「え？……ま、まあいいじゃない、済んだ事は」

蘭は、急に顔をそむけたコナンの前に回り込んだ。

「気になるじゃない！博士の家に行く予定だったんでしょ？」

「……あー……うん。実は、途中でひったくりを見かけてさ、追いかけてあの歩道橋を渡ったんだけど、足が滑って……」

「で、落ちちゃったの？」

「……そう」

「もう……気をつけなきゃだめよ？」

「そうだね」

世話焼きモードに入った蘭に相槌をうちつつ、コナンは盛大にため息をついた。

（歩道橋から落ちるなんてミス、もう二度とするか！）

さりげなく、人生における重大汚点ミスの一つになってしまったのは、ここだけの話。

16・似ていたのは(後書き)

なんか、あの夫婦に喋らせると文字数がやたら増えてしまうことに、終わってから気付きました。

随分と注目を集めていた歩道橋云々ですが、納得してもらえませんでしたかね・・・？つかちゃんとかちになっただかなあ。

感想などもらえたら嬉しいです。返信遅れますけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9879d/>

Reminds Boy - 面影を求めて -

2010年10月8日12時51分発行